

歴史における連続と断絶

—— ヴィシー政権の共和制的起源 ——

一九三九年九月一日、ドイツ軍がポーランドを侵攻したのにたいして、ポーランドの同盟国であった英仏が、九月三日、ドイツに最後通牒をつきつけ、第二次世界大戦が勃発したのでしたが、英仏連合軍とドイツ軍とのあいだで実際の戦火が交わされたのは、宣戦布告の八カ月後のことでした。フランス軍はドイツ軍の電撃的な奇襲作戦の前に完膚なき敗北を喫し、この全面的な軍事的敗北は政治的崩壊にいき着きました。こうして、フランスが七〇年の長きにわたって自由と民主主義の原理を誇りにしてきた政治体制、第三共和制はその命をもぎとられ、ヴィシー政権が成立し、その後の四年間、ドイツ軍占領下でフランス国民は

きわめて屈辱的な経験を強いられました。フランスでは、戦後長く、このヴィシー政権の四年間を、敗戦とドイツ軍の占領という外的要因によって強制され、道を誤ったものたちが同国の長い共和制の歴史を一時断絶させた、例外的で忌むべき期間と考えられてきました。

しかし、今日では、フランスの歴史家たちのほとんどは、ヴィシー政権の実行した政治綱領が、ヒトラーによって強制されたものではなく、新しい体制をつくりあげるために外的環境を利用しようとした、フランス人みずからによる試みであったと考える点で一致しています。ヴィシー政権の成立は、直接には一九四〇年六月のフランスの敗北

竹岡敬温

の結果でしたが、それは、一八七一年以来の第三共和制の歴史を「デカダンス」の過程ととらえた、フランス国民の一部の集团的感情のなかに深く根ざしていたのです。

ヴィシー政権が共和制の伝統を破棄しようとする政治計画を立てたのは、この「デカダンス」の過程に終止符を打つためでした。ヴィシー政権の指導者たちは、「共和国」に代えて、一七八九年に始まり、革命やクーデタなど、絶え間ない政変を経験してきた新しい時代と対照をなす、数世紀間続いた君主制国家という「輝かしい」過去をよみがえらせるために、独裁的で厳格に階級化された「フランス国家」を再建しようとし、農村世界の価値観と伝統に支配されたフランス社会へのノスタルジーをはぐくもうとして、フランス社会の——伝統的価値観をむしばんできた二つの要素——「民主化」と「工業化」——を促進してきた第三共和制にフランス国民の「衰退」の責任を負わせようとしたのです。ヴィシー政権は、第三共和制下の政治の民主化の歴史、最後には一九三六年に成立した人民戦線政府によつてさらに遠くまで推し進められようとした民主化の過程にたいする保守勢力の報復であり、共和制の記憶の場面に、それに代えて、フランス国民の新しい「集合的記憶」

を押しつけようとする試みでした。

フランス第三共和制は、民衆階級に「市民としての」政治的、社会的諸権利——市民権——をあたえることによつて、かれらを国民共同体のなかに統合しようとした。

この新しい共和制の試みがきわめて重要であったのは、フランス革命とそれに続く数世代が解決しようとして、なんどもつまづいてきた問題をそれが解決するのに成功したからでした。

共和制とは「国民がみずからを統治する」(ガンベッタ)政治体制であり、一八七五年以後、すべての成年男子が参政权をもつ普通選挙が定着したことによつて、すべての「市民」はかれらの利益の擁護を委託された代表者を議会に送ることができるようになりました。こうして、第三共和制は、(とくに農村社会において)貧しい階層に属する人びとにも、かれらみずからが政治的責任を行使する手段をあたえたのです。

また、第三共和制の政府は、急速な民主化を可能にするために、表現の自由を保証して、すべての国民が世論の形成に貢献できる可能性をあたえ、新聞のめざましい発達のおかげで、遠く離れている者でも、たがいに議論を交わせ

る「公共広場」が常設されました。

このように、フランスにおける政治の民主化に第三共和制がきわめて重要な役割を果たしたことを認める点で、すべての歴史家の意見は一致しています。それでは、第三共和制によって推し進められた民主化戦略は、なぜ、ヴィシー政権によって拒絶されたのでしょうか、逆にまた、第三共和制のどのような部分が「適法なもの」としてヴィシー政権に受け継がれたのでしょうか。そのことを理解するには、第三共和制の民主化戦略をしだいに蝕んでいったさまざまな矛盾をあきらかにしなければなりません。

第三共和制が誕生したとき、民衆階級の主要部分を占めていたのは、農民、小商人、職人たちでした。共和制の政治的プログラムが旧貴族階級や大ブルジョワジーに対抗して小土地、小財産の擁護を中心に据えたのは、そのためでした。また、自分たち自身、大部分、プティ・ブルジョワの知識階級出身であった共和主義の政治家たちは、弁護士、医師、大学教員などの「知的能力に富んだ人物たち」の利益を擁護しました。これらの職業にたずさわる人びとは、急速に、国家の頂点において、旧貴族、大ブルジョワジーにとって代わりました。しかしながら、一九世紀末

葉、この「民衆」と「中産階級」との同盟は、その力関係の均衡を覆す経済変動に遭遇しました。

一八七三年頃に始まる一九世紀末葉の長期に及ぶ「大不況」は、農村社会と農村工業（とくに繊維工業）に大きな痛手をあたえました。農民、とくに貧農の流出が加速し、この時期、数年間で五〇万人近くの農民が都市に移住し、新しい工業プロレタリアートの集団に加わりました。

一八九〇年代後半になって景気が好転し、フランスは重化学工業に基礎を置いた第二次工業化の時代にはいりました。しかし、このような工業化の進展は、農業社会と工業社会との絆の切断を早めることによって、社会的危機を強め、急激な変化をもたらした農村社会の危機と重化学工業の勝利は、まだ不安定であった共和体制の基礎を動揺させました。

一九世紀末、王党派との緊密な関係の下でブーランジェ將軍が企てた反議会主義的クーデタ計画の失敗は、共和体制がすっかり根を下ろしたことを示すものでありましたが、しかし、他方で、議会民主主義の発達は、政界の再編成を引き起こし、共和派の陣営を敵対しあういくつもの極に分裂させました。

右翼では、国家が国益を守り、社会的騒擾を終わらせ、カトリックと農村が支配的であつたフランスの伝統的価値の擁護を要求する旧貴族、大ブルジョワジー、小農民、中産階級の不満を支えに、ナシヨナリストの政党や団体がつぎつぎと生まれ、左翼では、ちょうどその頃、さかんになつてきた労働運動と結びついた政治勢力が成長しました。これらの左翼勢力は、しだいにジャン・ジョレスの率いる社会党に結集し、第三共和制の政権の座についたものたちがもはや体現しなくなつていたフランス革命の「進歩的」遺産を回復させました。こうして、社会主義が、政治や社会の革命的变化を期待する人びとにとつて、新しい希望の地平となり、社会主義の活動家たちの運動の下で、新しい二つの敵対する集団——「労働者階級」と「ブルジョワジー」——が政治の表舞台に這い上がつてきたのです。

一九〇一年の急進党の結党は、第三共和制内部のこのよ

うな矛盾する諸傾向に一種の妥協をもたらしました。ドレフュス事件では、急進党のリーダーのいくにか、とりわけクレマンソーがドレフュス大尉を擁護したことによつて、同党は、社会党が専有しようとしていたフランス革命の伝統をよみがえらせました。そして、人権擁護、反教

権、世俗化の主張が、これまで以上に共和主義の政治綱領の中心に据えられるようになりました。しかし、同時に、共和主義者は、保守派の要求を、それが民主主義の原理と明白に矛盾しないかぎり、尊重しようとしてきました。こうして、第三共和制成立当初から登場した「国益擁護」の主張がしだいにフランス政界の主要関心事となり、その結果、外国人や植民地の原住民が犠牲になつたのです。

国内の労働市場保護の要求と、外国人労働力を必要とする企業の要求とを同時に満たすために、共和制政府は、しだいに国家統制の度合を強めていった移民政策を策定し、景気の変動あるいは経済活動の部門に応じて、移民の入国を禁止したり、反対に、移民の流入を奨励して、外国人労働力が不可欠な場所にかれらを差し向けたりしました。こうして、鉱山業、製鉄業、化学工業の不熟練労働力の大部分は外国人労働者によつて供給されました。外国人労働者は、フランス国民にはあたらえていた権利を事実上まったく認められず、数万人の外国人労働者が、大企業の過度の搾取に抗議しただけで、警察の手によつて工場から排除されました。

このように厳しい措置がとられたのは、重化学工業の発

達が国の防衛にとって必要不可欠だったからであり、社会諸グループ間の仲裁者の立場を放棄した第三共和制の政府は、大企業の経営者との積極的な協力政策に乗り出し、こうして、製鉄業の経営者団体である鉄鋼委員会や新聞『ル・タン』紙に支持された新しい支配階級（フランス銀行の理事を構成する「二百家族」）の力を強めたのでした。

一九世紀末から第一次世界大戦をはさんで一九二〇年代末までの好況期における重化学工業の飛躍的な発展にもかかわらず、労働力人口の構造には大きな変化はみられませんでした。たしかに、この間、就業人口がもつとも増加したのは工業でしたが、一九三一年においても、いざんとして農業が最大数の労働力人口を雇用し、そのうえ、サービス部門の就業人口が工業のそれと同じくらい増加し、一八九六年から一九三〇年までの顕著な経済発展期の終わりには、フランスでは、経済活動の三部門（農業、工業、サービス部門）のあいだの労働力の配分がほぼ均衡状態に到達したのでした。

小土地、小財産擁護のほかに、第三共和制は、学校教育が社会的地位向上の手段になるという理念のうえに、その正当性を築こうとしました。一八九六年から一九三一年ま

で自由業がめざましく発展したことは、この理念を實踐するもので、その結果、この時代のフランス社会の深層を構成していた多くの小都市で、弁護士、公証人、医師たちが、かつては旧貴族、大ブルジョワジーが独占していた「名士たち」の新しいグループを形成するようになりました。第三共和制によって重用された大学卒業者のもうひとつのグループは公共部門の給与与生活者であり、その数はかなり顕著に増加しました。

また、国民のあいだの間接的な絆を強化するために、第三共和制はコミュニケーションの手段（郵便、鉄道など）と教育制度を発達させ、共和制の世俗文化の基礎を民衆層内部に普及させる役目になった小学校教員の数はいちじろしく増加しました。

こうして、第三共和制は、一九世紀末から一九二〇年代末までの好況期に、経済活動の各部門間の均衡維持と同時に社会的流動化の促進に基礎を置いて、その政治プログラムを實現することができました。このような共和制の戦略によって、工業化の生み出す変動の激しさが和らげられる一方で、政治的民主化が推進されました。フランスでは、なぜファシズムないし擬似ファシズムの運動がドイツやイ

タリアにおけるような強い社会的基盤をもつことができなかつたかの主要な理由のひとつを、そこにみいだすことができましよう。

しかし、同時に、共和制の戦略は、工業化の進行に取り残された経済部門（小土地所有や職人的手工業）に属する社会グループにその力の大部分を維持させ、伝統主義の政党に大きな社会的基礎をあたえることになりました。さらに、第三共和制は、不況時には外国人労働者を排除するという政策を採用することによって、ヴィシー政権下でその最悪期を迎えるナシヨナリズムの思想の成長に力を貸したのです。

一九世紀末から一九三〇年代恐慌開始までの、フランスに起こった急速な変化は、こうして、ヴィシー政権下で勝利するにいたる勢力を出現させる社会状況を準備したのでした。

一九三〇年代の世界恐慌の嵐は、第三共和制の政治戦略に弔鐘を鳴らすものとなりました。先進工業諸国全体に急速に広まった恐慌は、ヨーロッパにおけるファシズムの勝利の主要な原因となりました。フランスでも、一九世紀末に出現し、第一次世界大戦後ふたたび姿をあらわした極右

同盟の支持者数は、一九二四—一九三〇年の好況期には減少しましたが、恐慌の到来とその深刻化とともに増加しました。

恐慌の到来とともに、フランス政府は、一九世紀末葉の「大不況」のときと同じく、保護主義政策に戻り、一九三二年、輸入農産物にたいする関税を大幅に引き上げました。ドイツや中・東欧諸国では、恐慌と国際的な自由経済体制の崩壊は、まだ未成熟であった民主的諸制度を挫折させ、独裁的方法によって自由主義経済の変革をめざす国家主義的な勢力を急速に台頭させ、それらの勢力に政権を掌握させました。それは、第二次世界大戦の勃発とともに頂点に達する過程の始まりでした。

恐慌の最大の犠牲者は、工業の生産労働者でした。そして、工業の生産労働者の雇用減少において、失業の最初の犠牲者となったのは、重化学工業に多く雇用されていた移民労働者で、第三共和制政府は、社会問題を解決するため、ふたたび「ナシヨナルな」基準を使用したのです。職を失った外国人労働者たちは、滞在許可証を更新できず、かれらのうちの数十万人が故国への帰国を余儀なくされました。

恐慌はフランス社会全体の崩壊を引き起こすまでにはい
たりませんでした。共和制政府の行動を大きく麻痺させ
ました。恐慌対策の実施にたいしては国会もまたその無力
を認め、いく度も、政府の首班に「全権」を委任しまし
た。ドイツに宣戦を布告した内閣の首相グラディエは、フ
ランスが全体主義国家とたたかうためには、それらの国家
と同様な「武器」をもたなければならぬと主張して、全
権委任へのかれの要求を正当化し、独裁者の前例を引き継
ぎました。その結果、大戦勃発に先立つ一八カ月間にわ
たって、国会はその立法権をほとんど政府に引き渡したの
でした。このように、開戦のずっと以前に、フランスの民
主主義は効率的に機能するのをやめていたのであり、独裁
的慣行の先例はヴィシー体制のための範例をつくつたので
した。

恐慌のさなかの一九三三—一九三四年、多くの国会議員
を巻き込んだ金融疑獄事件、スタヴィスキ事件の発生に
よって、国会は世論の信用を失い、議会制度は「腐つて」
いて、政府にも国会にも恐慌を打開する能力がないのでは
ないかという一般的感情が広まり、その感情は民主主義に
代えて専制国家の樹立を主張するグループに利用されまし

た。

パリでは、極右諸同盟が国会周辺で繰り広げる街頭デモ
は日増しに激しくなり、一九七一年のパリ・コミュニケーション
来もつとも血なまぐさい街頭の遭遇戦となった、一九三四
年二月六日の流血デモで頂点に達しました。その夜の警察
とデモ隊との衝突の結果、死者一五名、負傷者は一、五〇
〇名近くに達し、第三共和制史上初めて、街頭デモの圧力
の下に、首相が政権を放棄したのでした。

一九三四年二月六日の暴動は、ファシズムにたいする恐
怖を掻き立て、左翼政道を反ファシズム連合に結集させ
て、人民戦線の勝利をみちびき、フランスにおける政治闘
争の過激化に決定的な役割を演じました。この時代の重大
な出来事のひとつは、共産党の登場でした。フランス共産
党が一九三五年以降急速に選挙民の支持を増やすことがで
きたのは、同党が極左主義の戦略を放棄したからだけでは
ありませんでした。共産党の党勢拡大は、工業プロレタリ
アートが政治の表舞台に躍り出てきたという、重要な社会
的事実の反映でした。

工業地域の労働者たちははしだいに共産党支持に向かい、
一九三三年以降、これらの地域ではストライキとデモが頻

発するようになりました。とりわけパリ郊外の大工場の労働者階級の登場とともに、労働争議は拡大し、激しさを加えました。政治面では、この現象は急進党を左翼との合流にみちびき、一九三六年の選挙における左翼連合——人民戦線——の勝利とそれに続いた工場占拠をとまなうストライキの全国的拡大は、経営者たちにかれらがそれまで拒否してきた譲歩——労働時間の短縮、賃金引上げ、有給休暇——を余儀なくさせました。

けれども、政治の表舞台への労働者階級の闘入は、社会危機を激化させ、人民戦線の勝利とともに、「社会集団を二つのブロックに分離する長い亀裂が、フランス社会の深部に生じ」ました(マルク・ブロック『奇妙な敗北』)。こうして、恐慌は、フランス社会のなかに、二つの敵対的で和解しがたいブロックを浮き上がらせたのです。

社会前面への工業プロレタリアートの突然の出現は、経営者層や中産階級を激しく動揺させました。なぜフランスのブルジョワジーが共和制の否認に追い立てられたのか、その理由をマルク・ブロックが『奇妙な敗北』のなかで説明しています。安定的な金利収入を完全に崩壊させた恐慌のために、「ブルジョワジーは、戦前のフランスにおいて、

もはや幸福ではなくなり」ました。かれらが子供時代から植えつけられ、かれらの社会的地位の根源にあつた秩序と階級制度を重視する価値観は、しばしば、ストライキ、街頭の騒乱、デモ隊の突き上げる握りこぶしによって脅かされました。そのような行為によって労働者たちが有給休暇その他の大きな社会的利益をえたという事実は、かれらの不快感を強め、「社会的不正」への反感を引き起こしました。大企業の経営者たちは、工場のなかで労働組合員たちがわが物顔にふるまうようになったのを許すことができませんでした。「小農民や労働者に交付された投票用紙が……旧敵の上層ブルジョワジーや貴族階級を排除することによって、かれらに役立っていた」あいだは、民主主義に好意的であつた経営者たちも、以後は、フランス社会の秩序回復のため、イタリアやドイツで勝利を収めた専制的解決法を支持するようになりました。人民戦線内閣が制定した週四〇時間労働法の修正に抗議して呼びかけられた一九三八年一月三〇日のゼネストが容赦ない鎮圧に遭つたことは、ヴェイシー政権下でかれらがおこなう報復の前兆を示すものでした。

多くのヨーロッパ諸国で保守党やファシズム団体を支持

したといわれる社会グループ、商人や職人たちのプティ・ブルジョワ層はどうであったかという点、第三共和制の指導的政治家たちは、最初から、自分たちの権力を強化するために、プティ・ブルジョワ層の支持を頼みにしていました。一九三〇年代の恐慌にさいしても、これらの中産階級は、かれらの遭遇している困難の解決策を政府がみつ付けてくれるであろうとの期待を棄てませんでした。しかし、その一部は、政府や国会の無力をみて、専制的な手段に頼らざるをえないのではないかと考えるにいたりました。けれども、イタリアやドイツと違っていたのは、これらの社会層が、共和制の原理を完全に拒否するには、すでに、あまりに民主主義の規範と慣行の影響を受けていたということではないでしょうか。

そのため、フランスでは、ファシズムないし擬似ファシズム団体は、一九三〇年代においても、ついに大衆の支持を受けるにはいたらなかったのです。プティ・ブルジョワ層の大半は、急進党に信頼を寄せつづけ、極右諸同盟は、いずれも大衆運動に成長することができなかったのです。

第三共和制は、「市民権」という概念に社会的な内容をあたえることによって、国民共同体内部への民衆層の統合

を主要な政治的課題とし、フランス社会の歴史に新しい時代を拓きました。共和主義者には、政治の民主化こそが、フランス革命の人権宣言の理想に背を向けずに、国民の一体性を強固にする最善の方法だともわれました。

一八七一年のパリ・コミューンがあたえた心的外傷はまだ消えてはいず、一七八九年以来フランスを血で染めてきた革命的暴力を終わらせる手段をみつけることが、第三共和制のすべての政治的指導者たちが取りつかれた固定観念となりました。共和主義の政治家たちは、労働者や農民が暴力に走ったのは、かれらがいつも権力の執行から排除されていたからだと考え、政治の民主化によって、このような暴力は存在理由がなくなるであろうと考えたのでした。共和制政府が腐心した問題は、それまで大きな力をもって「直接行動」の論理と関係を絶った政治行動を慣習化させるということでした。

普通選挙制度が、「もつとも貧しい人たちにも、かれらの選択、投票によって、租税、軍隊、戦争、裁判、正義、自由、教育、地方自治等に影響をあたえることができる」と教え、こうして、しだいに普通選挙は、権利であるとともに義務であると理解されて、社会の諸問題を方向づける正

当で合法的な統率者となる」(ガンベッタ)にいたりました。このようにして、共和制の市民権の原則がフランス社会内部に広く浸透し、大多数の国民には、暴力に訴えるのは不当で非合法的な解決手段とみなされるようになり、ヨーロッパのほとんどいたるところで暴力が勝利した一九三〇年代にも、フランスでは、大半の市民は、主として選挙をつうじて平和的に意志を表明すべきだと考え、暴力は小さな極右のサークルに限られました。

ヴィシー政権は、フランスの軍事的敗北という「外部的」要因の力の助けを借りてしか成立しませんでした。フランスでは、極右勢力の政権掌握が、国内の政治的混乱によつてではなく、外部的暴力によつてしか可能でなかったのは、第三共和制下で、民主主義の規範と慣行が社会のすべての層に広がっていたからでありましょう。

しかし、第三共和制は近代的な重化学工業の世界を周辺部に追いやり、国籍を基準にした労働力の差別をつうじて、工業化、近代化のもつとも不快な側面を「非市民」の背に荷なわせようとした。一九三六年に成立した人民戦線政府以前の第三共和制の政府が、近代工業の労働者にたいしてかれらが占めるにふさわしい場所を拒否したこと

は、その民主化戦略を弱めるものでした。そして、一九三〇年代における階級的エゴイズムの対立激化、それまで共和制のもとで保護されてきた社会諸階層の恐慌による地位低下、恐慌と人民戦線の勝利がもたらしたフランス社会内部の深い亀裂、それに加えて恐慌と時代の危機にたいする政府と国会の解決能力の欠如もしくは責任放棄は、第三共和制がその成立当初からかかげてきた希望を打ち砕いたものでした。

ヴィシー政権は、極右勢力だけでなく、経済が好況にあったとき第三共和制に利益を守られていた社会諸グループの雑多な要素の連合によつても、支持されました。一九三〇年代の恐慌がこれらの社会グループにもたらした地位低落のために、すべての「共和制に失望した人びと」が、民主主義にたいする敵対的組織に支持をあたえるにいたつたのでした。フランスを引き裂いた深刻な政治的分裂、労使紛争の激化、議会の無力化によつて激しく動揺したこれらのグループは、共和主義の伝統と根本的に関係を断つて国民を再生させることを約束した、ヴィシー政権の政治計画を熱烈に歓迎したのです。

(たけおか ゆきはる・大阪学院大学教授、大阪大学名誉教授)